

広土会新聞

第13号

2009.3.31 発刊

発行所 広島工業大学 広土会
〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1
TEL 082-921-3121

巻頭言



『機能が優れているものはデザインも優れている』

広土会会長 島 重章

全国の広土会会員の皆様、この度は広島工業大学広土会が創立40周年を迎え、広島支部長を執行委員長として卒業生1期から40期までの各幹事を軸に企画し、平成19年7月12日に広島市において祝賀行事を行いましたところ、約500名の会員諸氏にお集まりいただき、盛大に40周年を祝うことができましたことは、誠に同慶の至りであります。

さて昨今の世相は、金融危機問題に端を発した全世界的経済危機が我が国の経済界に深刻な影響を与え、各種産業面は大変厳しい状況に直面しています。このような状況の中で、従来のけん引役であった内需主導型である公共事業は、数年前から国家事業に対する見方が大きく変わり、そのことが今日、経済けん引役としての役目を得られないままに、建設業界の不況へと続いているのであります。

我が国の構造は、近年特に少子高齢化が進行し、医療、福祉、教育、文化などのいろいろなファクターの必要性が叫ばれています。それらの機能を動かすためには、インフラ整備が充分でなければなりません。その中には、これまで整備されてきたインフラの維持管理の重要性も忘れてしまっては、取り返しのつかないことになるのであります。環境問題を含めたインフラへの取組は、近年特に持続型、再生型への技術を要求されています。

5年前の巻頭言に寄稿しました私の記事を再読してみると、平成15年頃によく言われていたキーワードがそのまま現在社会に通用するようです。それは「公共事業と財政のバランス」、「持続可能な環境型エネルギーの再生」、「自然再生と環境保全」、「福祉のまちづくりと生活」、「災害と社会基盤整備」であります。これらに取り組むことのできる技術力がこれからも益々求められると考えられます。

大学における教育研究も、昨年から新たな方向性を出すための大き

な検討課題として取り組んでおります。土木技術のための教育は、これまでにハード面を主体とする社会に通用する人材の育成として、力学教育を中心に行われてきたように思われます。しかしながら、社会の情勢は情報化が進み、環境問題への取組、デザインの必要性、災害への対応など、ソフト面の必要性が要求されてきました。これまでのハード面および新たなソフト面を兼ね備えた人材育成の必要性が期待されているところです。

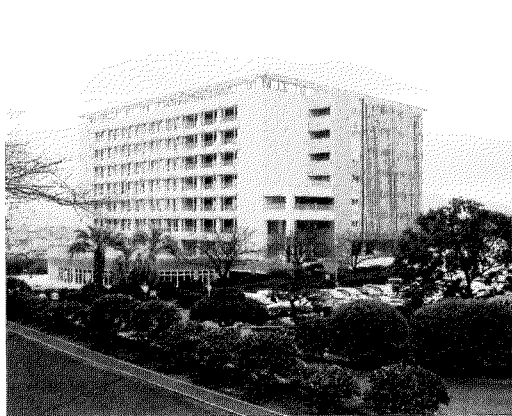
この両面を兼ね備えるためには、ハード面は理論的思考を、ソフト面は感性的思考を要求されます。ものづくりの技術がさらに優れたものになるためには、技術力の伴ったハード面とソフト面の充実が必要であると考えられます。そのためにも、大学教育の中で取り組む要素は、デザイン力の感性を兼ね備えた広い視野に展開できる卒業生の排出が考えられます。地域に求められる土木技術は、機能が優れた技術力であり、デザイン力の優れたものづくりが受け入れられるであります。

これからの大学教育は、地域や卒業生と一体となった授業展開が必要です。本学科へ入学してきた学生たちは漠然と土木に進むことを考えているでしょうが、具体的に現場の様子を知ることにより、さらに親近感から将来の魅力を感じ得る機会を与えてやる必要があると考えています。会員諸氏のこれまで培われてきた技術力を、技術者教育の魅力作りにしていきたいと考えておりますので、益々のご協力をお願い致します。

最後になりましたが、会員の皆様方のますますのご健勝とご発展を心から祈念し、巻頭のご挨拶といたします。

今年もよろしくお願いいたします。

「三宅の森 Nexus21」 Nexus(ネクサス)とは「絆(きずな)」を意味します。



広土会 40周年記念



挨拶

実行委員長

森川 泰雄（7期生）

この度、広土会創立40周年記念事業の実行委員長を務めて頂きます森川でございます。

記念祝賀懇親会を開催するにあたり、一言ご挨拶申し上げます・

本日は大変ご多忙なところ、ご来賓の皆様をはじめ、鶴学園理事長・総長である鶴 衛様をはじめとする大学関係の方々、並びに都市建設工学科の恩師の方々、衆議院議員であられる平岡 洋様のご臨席を賜り厚くお礼申し上げます。

また、広土会会員の皆様には約550名の方々のご出席をいただき誠にありがとうございます。

皆様ご存知とは思いますが、この広土会は、広島工業大学土木工学科、現在は建設工学科、都市建設工学科と変遷はございますが、この学科の卒業生、在校生並びに教職員で構成された組織であり、土木技術の向上、会員相互の親睦を図ることを目的に昭和43年10月に結成されたものでございます。

現在、大学内にあります広土会本部をはじめ、全国各地に11支部を擁し、会員数も4,000名余の大きな組織となっております。

広島はもとより、全国において官公庁や建設業界、コンサルタント業界をはじめ数多くの分野で活躍されているところです。

さて、わが国経済は、資機材の高騰、原油高の高騰等で企業収益など一部に弱さが見られるものの、景気の回復が期待されていますが、建設業界関連は依然として厳しい状況が続くものと見込まれています。

われわれ土木技術者の果たす役割は、今後も重要なものがあると思っています。

40周年の節目を迎えるにあたり、広土会としては、これまで築かれてきた輝かしい伝統を継承し、この変革の時代に対応した会に発展させるため、会員各位がより一層の努力を重ねていかなければならないと思っています。

終わりに、広土会創立40周年記念事業の開催にあたり、絶大なご協力、ご支援をいただきました関係者に対して、心から感謝申し上げますご挨拶といたします。

本日は、誠にありがとうございました。



広土会創立40周年記念講演会に寄せて

記念講演会委員

伊藤 岳司（16期生）

荒野に咲いた一輪の花、掃溜めに鶴、鶏群の一鶴、天水桶に龍..... なんと表現してよいか、300人余りのむさ苦しい男達が客席を埋め尽くす講演会場に、ひときわ美しい講師が登場した。

美女の出現に興奮冷めやらぬ会場で、壇上に立った一輪の花から発せられた第一声に、再び男どもが心奪われたの言うまでもない。

いよいよ始まった講演会の主役は講師の有賀さつきさん。かつてフジテレビのアナウンサーとして活躍され、フリーとなられた現在もテレビの司会、アナウンス指導、全国各地での講演活動などで幅広く活躍中。なるほど、多くの人の前に立って活躍中の女性はいくつになっても美しい！会場内は不思議な空気に包まれ、男どもの視線は釘付け、鼻の下は伸び、目は虚ろ、口は半開き.....。

話は戻って、今回の演題である「向き不向きより前向き」は、有賀さんがアナウンサーを志していた時代に、アナウンス学校の先生が言われた言葉だとか。アナウンサーを目指す自分が、果たしてアナウンサーに向いているのかそうでないのか。そんな疑問に悩む有賀さんに対し、物事に前向きに取り組むことこそが大切であると言われたとのこと。

アナウンサーになられた時にも、そしてフリーとなって活躍される現在に至っても、人生の岐路に立つたびにこの言葉を思い出して歩むべき道を探し出す。そうすることで、それまで当たり前だと思っていた日々や、辛いことに直面している現状の中にも生きがいを見出すことができ、小さな幸せを感じることができると話された。

今まで経験したことのない仕事や難しい人間関係の現場にあって、一人では何もできない自分を知り、たとえ仕事が少ない時期にあっても、この言葉を思い出して喜びを見つけ出したと話された。

向いているか、向いていないかと気にしている自分より、たとえ不向きであっても前向きに取り組んでいるときの自分の伸び率は抜群だと感じておられる。なるほど、きっとそうに違いない。

うーん。感動的だ。いい話だ。何だかわからないけど勇気がわいてきたぞ！ とかく後ろ向きになりがちな私にとって、なんと感動的な言葉だと感心することしきりであった。

続いて始まったのは、有賀先生による話し方教室。先生によれば、「会話の主役は聞き手にあり」だそうである。対話を深める秘訣は、なるべく相手に話してもらって、短い文章で答えることが必要。文章を長く続けると話の要旨が伝わりにくくなるため、短い文章で小気味よく意思を伝えることが大切なのだとか。ということは、いつものだららとしゃべっている私の意志はまったく相手に伝わっていなかったのか！それでは...、なんとなく家族の会話に混ざれない空気が...

そのほかにも、話をするときの表情、体の動き、目線の流れなど、普段気付かずにいることに少し気を配るだけで、「話し上手」「聞き上手」になれると教えてくださった。大変参考になったの言うまでもない。

会場からは、「初対面の人との会話が弾むコツは？」、「人前でうまく話すには？」などの質問が出され、これらの質問にも気軽に答えてくださった。こうして、あっという間の1時間が過ぎ、盛況のうちに講演会は終了した。

たとえ不向きであっても、前向きに取り組んでいるときの自分を大切に、苦悩の中にも生きがいを見出すことで、小さな幸せを感じることができるとの話を胸に刻み、美しき講師との別れを惜しんだのであった。



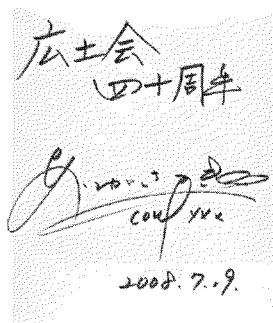
広土会創立40周年記念祝賀会によせて

記念祝賀会委員長

藤光 孝司（7期生）

「広土会」創立40周年おめでとうございます。一会員として心からお祝いを申し上げるとともに、長年にわたって本会にご尽力をいただいた、諸先生方をはじめとして、広土会会員の皆様に敬意と感謝を申し上げます。

10年前のことが気になり、30周年記念誌を読み返してみました。その中で寄稿文の内容の多くがバブル経済崩壊後、業界秩序の瓦解や業界内の淘汰も加速し大変な時代であることが多く述べられています。それから10年、いまでは企業の倒産は珍しくなく、夕張市のように地方自治体が財政破綻を迎えるような時代となり、地方自治体の財政破綻が



現実化してきています。公共投資の削減続く中、建設業界はさらなる厳しい時代を向かえています。厳しい環境ではありますが、今後も建設技術者の果たす役割は重要であり、必要不可欠なものと考えています。いまこそ、原点に立ち返り、知恵と想像力をいかしてこの時代を乗り越えていくことが必要だと思います。

さて、広土会40周年記念祝賀会についてですが、詳細については付属のDVDにてご覧いただければと思います。ここでは、概略について述べさせていただきます。広土会40周年記念祝賀会は30周年記念事業でもお世話になった水原みすえ氏と17期生の舩繁 昌志氏の司会進行で行われました。祝賀会は鳥神太鼓の高鳴る鼓動で始まり、実行委員長の森川泰雄（7期生）氏の開会の言葉で開演致しました。来賓として、鶴 衛理事長、茂里 一紘学長、平口 洋衆議院議員をはじめ、多くの方々にご出席いただくとともに、遠くは東京、あるいは鹿児島から総勢500余名の会員の参加がありました。

会は来賓紹介、来賓の祝辞として、鶴理事長、茂里学長、横山同窓会長、並びに平口衆議院議員の方々よりお言葉を頂いた後、鶴 襄名誉総長先生銅像建立募金の贈呈と進み、副実行委員長の原田 忠明（9期生）氏の乾杯で宴は進んで行きました。歓談中は昔懐かしい学生時代の話や近況報告など話題は尽きなかったようであります。続いて、都市建設工学科の教職員の紹介、そして広土会40年の歩みをスライドにて紹介がされ、懐かしい校舎やカープの優勝シーン等を見て40年の月日の長さを感じました。会も終宴を迎え、森川実行委員長を中心に7期生有志一同による広島工業大学大学歌の斉唱、最後に竹内 勝喜（1期生）氏による万歳三唱で2時間におよぶ広土会40周年記念祝賀会は幕を綴じました。

最後になりましたが、この広土会40周年記念祝賀会の企画、運営を行いました廣本幹事長、三浦先輩（3期）、祝賀会部会（小林（7期生）、大石（8期生）、田中（11期生）、橋國（13期生）、小田（14期生）、舩繁（17期生）、牧野（26期生））の皆様方のお力により、りっぱな祝賀会が開催されたことに感謝と御礼を申し上げます。

今後、広土会50周年の開催を願うと同時に、広土会の益々のご発展と会員皆様方より一層のご活躍をお祈り申し上げて、広土会40周年記念祝賀会の報告とさせていただきます。



支部だより



広土会創立40周年記念に寄せて

関東支部長

西尾 修一（5期生）

広土会創立40周年にあたり、まず皆様と共に祝いしたいと思います。記念講演会における有賀氏の「人前であがらない話し方には、基本的なテクニックがあり、日々それを身につけ反復する必要がある。」という話には、日ごろその必要性は認めながらも専門的な訓練を受けることがなかった私には何か新鮮な言葉として響きました。祝賀懇親会では、卒業以来初めて会う同期生がほとんどで懐かしさと共に広島を離れた長い時間を思い知らされました。

広土会は、故桜井孝男先生の音頭により創立されて以来40周年を迎え全国に11支部4,000名の会員を数える組織となり各分野で指導的役割を果たし地域の発展に寄与しているとのことでした。

広土会関東支部は、昭和53年4月9日（旧湯島会館（現在の東京ガーデンパレス））で発起人である加藤孝二郎（2期）、井本啓則（2期）両氏のお骨折りで2期、3期卒業生を中心に組織され30年を経ています。私は、当時の青焼きの名簿（53名）を引き継いでいますが、紙の古さと共に一部三県でやっと連絡を付け、名簿を作りながら関東支部を作った熱い気持ちが伝わってきます。その後通算26年にわたり関東支部長を歴任された梶野良夫氏（2期）は、その間広土会の行事に参加し、卒業生と連絡を取り会員相互の親睦・意見交換に務められたことにあらためてその苦勞に敬意を表するものです。初期の卒業生（1期～4期）は、毎年の支部総会出席者の1／3を占め現在も当時の熱い気持ちを持ちつづけている世代です。

今後、関東支部は、実質的に支部を支えてきた先輩方の本格的な退職時期に差し掛かること、少子化と土木を目指す若者が減少する中で関東まで出て働こうという新しい会員は年々減少し関東支部全体とすれば、実質的会員数が減少していく状況です。私にできることは、広土会会長島 重章先生の「広土会が技術力を高め生涯教育の場になることが会員を支え合う大きな力となる。」との言葉を実践することであり東京近郊に在住し、今まで関東支部会員から抜け落ちていた現役卒業生の発掘と第二の人生を歩む先輩卒業生の「集まる場」と次の世代にお願いすることになる「技術の研鑽の場」の実現にむけて努力していくことです。

最後になりましたが、広土会創立40周年にあたり、ご指

導いただいた先生方、準備をされた幹事の方々へのお礼とともに、全国の広土会会員皆様のご健勝とますますのご活躍を祈念いたします。



広土会創立40周年記念に寄せて

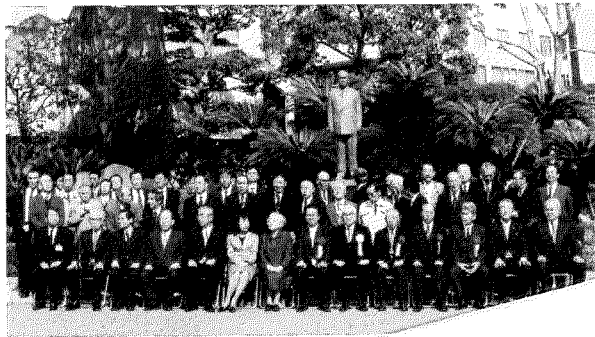
関西支部長

佐賀 勉（2期生）

会員の皆様広土会創立40周年記念パーティーまことに改めてどう御座居ました。紙面をお借りいたしまして、記念講演会等準備されました幹事の方々に、厚く御礼申し上げます。次回は50年になるかと、思っております。

昭和45年に卒業いたしまして、還暦を迎え元気に働いておりますが、今日の、日本を見つめますと少子化問題、ニート、社会保障費の増大、格差社会経済混乱のため、国策をもう一度考え直す時期では、と考えております。

社会資本の整備についても、今まで日本経済を支えてきた土木分野における人材が、経済変化とともに、企業や大学においても集まりません。いわゆる格差が土木関係企業に生じ、将来土木に進みたいと思意思のある学生が少なくなっているのが、現状だと思ひます。大学も生き残りをかけた時代に突入しました。私見ですが、経済変化は、20年から30年サイクルで変化していくように思われます。社会基盤の整備事業も、今後国力の衰退とともに、日本国内では、飛躍的な伸びは、見込めないでしょう。平成12年から中央官庁などの予算措置減少傾向でした。平成12年以降弊社の取り組みは、環境創生事業風力発電事業開発、鋼構造物（橋梁）等のライフサイクルコストの低減を考え、構造物の補強補修設計コンサルタントを、立ち上げました。時代の波を肌で感じ、起業していける人材が、求められております。基本的な、構造物の補修、補強等も、土木技術が求められています。又今日もつとも日本に足らない食物の自給率40%この問題に対しても早急に手打たないといけない、問題だと思っております。広島県世羅町で2期生の、児玉氏が、カゴメ株式会社と、パートナーシップを行い、大型トマト生産工場を展開されております、地元の雇用創生事業にも、貢献されております。この辺に、土木分野からの、参画が、期待されると思ひます。興味のある方は、一度見学されては、如何でしょうか。とりとめのない話で申し訳ありませんでしたが、何か今後の参考になれば、幸いです。兎に角今回の広土会大成功おめでとう御座居ました。





広土会創立40周年記念に寄せて

岡山県支部長

青江 邦男（1期生）

広土会会創立40周年、誠におめでとうございます。このように広土会が発展したのは諸先生方、事務局のご努力と会員の各方面での活躍の賜物と敬意を表する次第です。

私が土木技術者を目指したのは、当時石原裕次郎の映画「黒部の太陽」を観て感動したからです。広土会発足と同じ頃ではなかったかと思います。工大卒業と同時に岡山県庁に入庁したのが約40年前、振り返ってみますと、私たち土木を取り巻く環境は大きく変わってきました。土木技術者として公共事業に携わり県民のため市民のためと与えられた仕事に一命をかけ、誇りを持ってやってきました。多くの公共資産を造り生活環境の向上、生命、財産を守り社会の発展に寄与することを使命としてやってきて、それを高く評価もされました。

しかし最近公共事業に対する風当たりが、非常にきつと感じております。公共事業はなんでもかんでも一部ゼネコンの利権あさり、税金を無駄に使う悪であるというように、マスコミでも報道されております。確かに一部では効果の低い事業もあったかもしれませんが、しかし大部分は社会発展に多大な寄与をしていると確信しております。無駄な事業と批判があるのは確かであり、それは真摯に受け止め、私たち土木技術者への励みだと考えて取り組まなくてはならないと思います。真に必要な事業が遅れたり、中断されたりすれば、それこそ県民市民への損失で、社会生活が脅かされる事態になりかねません。これからは経済効果等説明責任を果たして、土木事業に対する理解を得ることが、これから土木が生き延びていく道だと思えます。

広土会発足当時から今日までを振り返り感じたことを書かせてもらいました。広土会の益々の発展と会員の皆様方のご健勝をお祈りし終わりとします。



広土会創立40周年記念に寄せて

阿讃支部長

松山 憲一（1期生）

広土会創立30周年記念事業を開催した10年前には、土木を取巻く環境は経済バブルが崩壊し一層厳しさを増しており、この不況下を耐えて乗り切らなければならないと、皆口々に訴えていたのを思い出します。あれから10年が経過しましたが、今日においても、建設業界だけでなく、社会の諸々が以前に増して低迷してきています。

この様な中で、「広土会40年と明るい未来を、飲んで、食べて、語る」と題して、広土会創立40周年記念事業が、前回と同じリーガロイヤルホテル広島において、明るい明日を願いつつ、全国から会員が集い盛大に開催されました。

記念講演会では美人の有賀さつき講師が、「向き不向きより、前向き」の演題で講演され、私は最前列のかぶり付き席で聴講しました。最初は話が演題と少し違うかなと思いつつ、眠気を催す中で聞いていました。そのうち、上手な話し方、読み方、聞き方の話になり、私の口下手が少し良くなるかも知れないと思い、目もパッチリと目覚めて聞き入りました。

その後の記念祝賀懇親会では、御来賓、先生方、我ら1期の同級生や広土会を受け継いできた後輩が一同に集い、飲んで食べて、楽しく面白く語り合い、懇親の2時間を有意義に過ごすことができました。今回は、遠く鹿児島から来てくれた友も居り、学生時代と少しも変わらず、卒業以来の再会で大変懐かしかったです。話は変わりますが、変わらないと言えば、懇親会に参加した数人が、恩師の鈴木健夫先生は、40年前に工大で教鞭をとっていた頃は30歳代だ

ったのか。すんぐりとした体形、福良かな顔と色艶、頭のはげ具合、機敏な動き方、ほとんどが昔と変わらないのは何故？ほんとに不思議やなあと言う。私は、時折お会いしていたので、特に意識していませんでしたが、そう言われればそうやなあと思いました。鈴木先生、これからも元気パワーで広土会員を応援してくださいね。

今回の記念事業の翌日は、14名が1期生ゴルフコンペに参加し、鷹の巣ゴルフクラブでゴルフを行いました。私はいつもの珍プレーと偶然的のナイスショット有りでゴルフを存分に楽しみ、大いに満足して立石道夫君と帰路につきました。お世話をいただきました竹内勝善君、ありがとうございました。

最後に、広土会会員が、会員相互の親睦を図り、建設業界やコンサルタント業界をはじめ数多くの分野での建設技術を更に発展させ、より一層社会に向けて飛躍し、明るい未来となるように寄与し、現在の建設業界の厳しさを乗り越えて行くことを願います。

広土会創立40周年記念事業の開催のお世話を頂いた皆さん、大変ありがとうございました。広土会の皆様方には、これからも健康に留意され、益々、ご活躍されますことお祈り申し上げます。



広土会40周年を迎えて

愛媛県支部長

田坂 善長（2期生）

昭和45年卒業して、はや39年広土会の創立とほぼ同じ年数を経過してしまった。

5年間営業をやり、この春から道路現場に復帰こんなに厳しかったのかと、再確認と後悔の毎日です。これが最後の現場になるだろうと考えています。

土木を取り巻く環境は現在、これ以上悪くなら無い程厳しく、辛いものになっている。今後本当に必要な社会資本整備は何なのか、我々土木関係者だけでなく、皆の関心を高めることが出来ればと思っています。今こそ会員が情報交換を取合い、難局を乗り越えなくてはと考えています。

愛媛県支部の会員も頑張っていますので、今後ともご指導宜しく願いますとともに母校の益々の発展と広土会会員の皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。



広土会創立40周年記念に寄せて

広島支部長

森川 泰雄（7期生）

「広土会」創立40周年おめでとうございます。会員の一人として、心からお祝い申し上げます。

平成20年7月19日リーガロイヤル広島において、広土会創立40周年記念事業を開催しました。

会場には、鶴衛鶴学園理事長・総長をはじめとする大学関係の方々、並びに都市建設工学科の恩師の方々、平口洋衆議院議員、広土会会員併せて約550名のご参列をいただき、盛会に記念事業を開催することが出来ました。ひとえに関係各位をはじめ広土会会員のご支援、ご協力の賜と心から感謝申し上げます。

私は、記念事業の実行委員長を務めさせて頂き、関係者の皆様方のご協力、ご支援をいただき無事大役を果たすことができました。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。

あらためて、広土会会員の方々の心意気を強く感じると同時に、今後行われる予定の45周年・50周年の記念事業が更に盛大な事業となることを願っています。

さて、わが国経済は、資機材の高騰、原油の高騰等で企業収益など一部に弱さが見られるものの、景気回復が期

待されていますが、建設業界を取り巻く環境は、公共事業の減少、昨年の改正建築基準法による建築確認審査の混乱等があり、依然として厳しい状況が続くものと見込まれています。

このような状況の中で、土木技術者の更なる創意・工夫を含めた技術力の向上が必要であると感じていますが、我が広土会会員には、十分な資質があると確信しており、これからも情報交換等を行いながら、しっかりと足元を見据え、頑張っていければと思っています。

最後になりますが、広土会の益々の発展と会員の皆様方のより一層のご活躍をお祈りいたします。



雑感

=ガッツとパワーで前向きに=

県東部支部長

古谷 秀次郎（1期生）

広土会は、この度、2008年に創設40周年を迎えることができました。母校に衷心より「おめでとう」と「ありがとう」の言葉をささげたいと思います。

母校は青春の拠り所であり、大学時代のいろいろな活動を通じて人生の財産とも言える「人的ネットワーク」を築く礎でありました。

その後、40年間、われわれ広島工業大学・土木系卒業生は、さまざまな職場において真摯に生き、「豊かでゆとりある生活を支える」ことを目的とするインフラ建設に専心して取り組んでまいりました。

また、激動の建設業界の中、数多くの「ガッツとパワー」を備えた技術者を輩出し、広工大・土木が社会的に大きく認知され、伝統大学としての地位を得るに至ったと思います。その陰には、広土会・会員相互のコミュニケーションと助け合いの場の存在があったことに感謝いたします。

さて、記念祝賀会（県東部支部から40名余が参加）は、島・広土会会長の主催者挨拶で始まり、つづいて、鶴・理事長、茂里・学長に祝辞をいただきました。お話の中に、瀬戸内海を一望できる学びの環境として「高層10階建・新講義棟」、「未来への夢を託す数々のプロジェクト」などがあり、参加者一同は感激を新たに拝聴いたしました。

一方、建設業界は、従来より、全産業就業者の約10%弱に当たる450万人が関わり、総投資額は年間約50兆円弱で推移しています。このため、わが国の経済の中で大きなウエイトを占める、いわば、基幹産業と目されてきました。一般の人々の目には、総合請負業者は、一旦仕事を任せれば何も心配しなくても確かな技術力と慣れたマネジメント力で建造物を引き渡してくれる、まことに、「便利な業界」として重宝されてきたのも事実と思います。

しかしながら、この数年間は、建設投資の減少やそれに伴う価格の過当競争、グローバルな金融市場の混乱などと相俟って「便利な業界」であるためのコスト面での余裕が無くなってしまいました。あまつさえ、建設投資がまるで無駄な事業の代名詞とまで言われ、建設業界は、存亡を賭ける戦いを強いられるに至っております。俗っぽく言えば「踏んだり蹴つたりの業界」と言っても過言ではないでしょう。

いみじくも、同日の記念講演でフリーアナウンサーである有賀さつき氏が「初対面の相手には笑顔で対応」「相手を見る目線は3分割・9分割の割合で」「何ごとにも、得意でなくとも前向きに」など、ご自身の処世術を話されました。時節柄、明るいイメージとして強く記憶に残りました。

現在、激動の業界情勢から、全ての分野で、提案技術を重視する本格的な技術競争時代への突入が顕著にみられます。さらに、受注時には経験技術の有無が大きくクローズアップされるようになってきております。

このような混迷の時こそ、「ピンチはチャンス」の精神で、しかも、世の中の動きの速さに遅れないよう「前向き」に取り組むことが、必要かつ不可欠なことと思います。

わたくしの座右の銘に「不為也 非不能也」と言う孟子の言葉があります。これは「できない」と言って、「やろうとしない」ことへの注意喚起だと自己流に解釈しております。

どうか、後輩のみなさまも孟子の言葉を心の糧に加えていただきながら、持ち前の「ガッツとパワーで前向きに」いこうではありませんか。

最後になりましたが、今後とも、広土会がいく末永く発展することを願っております。



広土会創立40周年記念に寄せて

広島県北支部長

國原 定明（10期生）

広島工業大学広土会創立40周年おめでとうございます。また、平成20年7月19日にリーガロイヤルホテル広島で記念講演会・祝賀懇親会が盛大に開催できたのも広土会本部役員や実行委員会の皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

有賀さつきさんのすばらしい記念講演会、そして一番楽しみだったのが祝賀懇親会でした。学生時代にお世話になった先生方や、4年間ともに学びともに遊んだ同期の仲間と、飲んで、食べて、語れることでした。我々10期幹事の川西君、木原君の呼びかけにより沢山の仲間に出会えました。創立30周年で会って以来の仲間や、卒業して初めて会った仲間もいました。卒業して30年で50歳を過ぎ、それぞれの職場で幹部になったひと、独立したひともありました。いま、世の中や我々の業界は、大変厳しい環境にあります。みんな、お互いの近況や学生時代の思い出を語り合い盛りあがっていました。私も、引き続き二次会に参加し深夜の高速バスで三次に帰りました。みんなで今度は、幹事が同期会を呼びかけ集まることにしました。

広島県北支部も、今年2月2日に島広土会会長・村中会計役員の出席を頂き、支部会員19名の参加のもと19回目の総会を三次グランドホテルで開催しました。広島県北支部も来年は、20周年を迎えます。そして、広土会創立40周年を迎えた今年、初代支部長和田一雄先輩から広島県北支部長の大役を引き継ぐこととなりました。

広土会が成人式（20周年）を迎えて生まれた県北支部が来年成人式（20周年）を迎えます。広土会本部の皆様、そして各支部の皆様、今後ともご支援ご指導を宜しくお願いいたします。

最後になりましたが、広土会の益々の発展と会員皆様により一層のご活躍をお祈りいたします。



広土会創立40周年記念事業に想う

広島西支部長

原田 忠明（9期生）

広土会創立40周年記念事業が、多くのご来賓をお迎えし、400名を超える会員の皆様の参加により、盛大に開催されましたことに、実行委員会の一人として感謝申し上げます。

当日は、お世話になった先生方にも久しぶりにお会いし、また、同期生と近況や、学生時代の懐かしい思い出などを語り合い、2次会を含めて大変楽しく有意義な時間を過ごさせていただき、この場をお借りしましてお礼申し上げます。

また、記念事業の実行委員会の一員としてこの会合を通して、広土会の創立に関わられた1期生をはじめとする諸先輩方のこの会への強い想いや情熱と、40年の間に刻まれた伝統と歴史の重みを改めて感じる事が出来ました。

一方では、景気の冷え込みや公共工事に対する批判的な世論を背景とする多くの会員が従事する建設業界の低迷や、大学の土木技術者を目指す学生が著しく減少しているとい

う声も聞き、寂しくもあり、この先、私が4000人を超える会員を持つ広土会に、また広島工業大学都市建設工学科の未来に、土木技術者として、何が出来るかを考える機会でもありました。今、自分が何をしたらよいか、何が出来るかは見つかつてはおりませんが、今後は、広島西支部の行事を開催し、多くの会員の皆様に参加をいただき、皆様と共に考えていきたいと想っています。

現在、私が勤務する廿日市市においても、47名の会員が道路整備を始めとする社会資本の整備や施設の維持管理の職務に携わり、日々忙しく職務に専念しており、廿日市市のまちづくりもそれを担う技術職員を育てていただいた広島工業大学の都市建設工学科があるからこそだと思っています。

まだまだ、まちづくりは必要である。地域の災害などに迅速に対応できるのか？などを考えると、これからも、社会は、多くの土木技術者を必要としており、これからも広島工業大学都市建設工学科が益々発展し続け、すばらしい広土会の伝統や歴史がより一層深く刻まれ、広土会創立記念事業が45周年、50周年とこの先、益々盛大に開催され、会員の皆様とともにお祝いできることを願ってやみません。



広土会創立40周年記念に寄せて

島根県支部長

福田 滋（6期生）

私たち六期生が広島工業大学土木工学科に入学したのは昭和45年であり、大学（学科）としては出来て間もない新生大学でありました。今ではその同窓会が創立40年を迎え、堂々たる歴史を備えた風格ある大学（学科）に成長したことを誇りに思うとともに、卒業生の一人として、今日まで広土会を支えてこられた皆様に深甚なる感謝を申し上げる次第であります。

7月に行われた記念事業後の懇親会では、同期生毎にテーブルを囲み、山陰に暮らす私にとっては卒業後初めて会う人も多く、年齢を重ね容姿の変化はあるものの学生時代の面影はしっかりと残っており、お互いの記憶を手繰り寄せながら、久々の再会を喜び合い、近況を語らい、旧交を温めることが出来ました。また、恩師の鈴木健夫先生にもお会いし、以前と変らぬアグレッシブなお話しぶりに元気をいただいたところであります。その外、仕事の上で何度か関わりを持たせていただいた、県外で活躍中の多くの同窓生にも再会し、当時の話を懐かしく交わすことができました。

記念行事には、島根県支部から9名の会員が参加いたしましたが、支部会員は学科の歴史を重ね次第に数を増し、現在では百名を超えており、他支部と比較しても遜色のない会員数となりました。活動内容としては、毎年夏、支部長会議の報告と支部総会打ち合わせのため役員会を行っております。また秋には、いずれも島根にゆかりのある島会長や皆田先生をお招きして、支部総会を開催し、会員相互の親睦を図っているところであります。

しかしながら、総会に集まるメンバーはどうしても固定化される傾向にあり、その中心は卒業期一桁代ですが、そろそろ定年を迎える先輩も出てきており、新しい力の参加、若いエネルギーの注入が急務となっております。

我々六期の在学中には、中東戦争に端を発した石油危機が勃発し、インフレが加速し高度経済成長が終焉を迎えました。創立40周年に当たる今年は、世界を瞬時にして自在に駆け巡る投機マネーや地球温暖化がもたらす異常気象の影響で、原油・資源・農産物が高騰し、在学当時とやや似たような様相を呈してまいりました。島根県下においても、全国に先駆け少子高齢化社会が進行し、地域活力の減退が懸念されております。

このような、将来の経済成長に不安の抱かせる厳しい状況に際して、久々に顔を合わせる学び舎を共にした仲間と、

情報交換する中で、思わぬ転機を迎えることや更なる発展のきっかけが生まれる可能性があるものと考えております。そのため、定期的に集い、会員相互の結束を高めておくことは有益なことであります。

終わりに、40周年記念事業を盛大に開催していただいた実行委員会の皆様に感謝するとともに、広土会の益々の発展と会員各位のいっそうのご活躍を、心からご祈念申し上げます。



広土会創立40周年記念によせて

山口支部長

渡辺 勉（6期生）

広土会の皆様には御健勝にて御活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、昨年は2007年8月に表面化した米サブプライムローン問題が顕著化し、米リーマン・ブラザーズの破綻など世界中に金融危機をもたらししました。円高、有価証券の下落、米経済をはじめとする世界経済の後退など、先行き不透明な時代に入った感がします。

こうした暗いニュースが多い中、山口支部は同窓会周南支部と共に活動を年3回から4回いたしており、先輩、後輩と楽しくまた議論をしながら勇気付けられ楽しいこと、辛いことを乗り越えているのも広土会の先輩方の叱咤激励のおかげと思っており、明日からの生活に活力をもらっております。山口支部活動も若い人が少なく若い人との交流を今後のテーマとして考えてゆきたいと思っております。

ただ、このような経済情勢の下だから出来ること、観えることもあります。決して萎縮するのではなく、知恵の限りを尽くし、自信を持って前向きに歩んで行くことが必要です。足元の努力は当然ですが、将来のためにも力を蓄えておくことが必要です。

そのためには、大きな目標を持ち、諦めることなく実現に向けて頑張ってく、先行き不透明な時代だからこそ夢をもち続けることが大事だと思います。

私たち技術者は社会の基礎を支えるインフラがキチンと機能するのは皆様の日頃の努力の成果であろうという自信を持って頑張ってほしいと思います。

今後も引き続きゆっくりと活動してゆきますので皆様の変らぬご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、広土会の皆様の精進と御活躍をお祈り申し上げます。

卒 業 生 だ よ り



広土会創立40周年記念に寄せて よき先輩、後輩、御同輩

大瀬戸 悟巳（2期生）

広土会40周年記念事業が盛大に開催され、おめでとうございます。

広土会会員の皆様方が、種々な方面で元気にご活躍されて頑張っておられ、元気付けられて大変良かったです。

さて、私はこの春から再就職をしましたが、定年を迎えるまで頑張って来れたのは素晴らしい先輩方が居られたことだと思っています。振り返ってみますに、入社当時は国立、有名な大学から来ておりまして、少々気が引けていました、しかし広島工大土木の1期生の古谷秀次郎、水野次憲、大田満廣先輩達が頑張って居られ、今から会社の中で歴史を作るんだという気概を感じ取りましたので、2期生が名を落としてはいけんぞと思いましたね、それから、他社及び役所に於いても先輩達がやはり頑張っておられたか

ら、私は、堂々と広工大の土木を出たんだという自負を持って仕事に当たるように気を持っていました。それは、38年間の前半の10年は主任に就いて仕事を覚えるのと忙しさと怒られるのが商売のようで、辞めてやろうかとも思いつながら我慢我慢の連続でした、10年を乗り越えるようになると、1つ1つの工事を苦勞をして完成させた時の充実した気持ちと喜びを味わえるようになってきましたから、後の20年は、現場を任されて、ものづくりの先頭に立ち若い人達を育てながら、皆で無事工事を完成し終えた時の喜びの繰り返しでした。今思うに、建設屋はオールマイティな職業で、多方面（工事管理、安全管理、事務管理、人材育成、現場営業等）の事をこなしていかなければならない。厳しい社会になっていますが、若い後輩達は体力を付け元気に何事も忍耐強く立ち向かって、少々の難苦に挫けず、ものすくりに頑張って欲しいと思います。人生は良き先輩、後輩、ご同輩が居る事を忘れずに大事にしていくサイクルだと思います。



古代出雲における 弥生青銅器文化について

元島根県立古代出雲歴史博物館PR御師(おし)
田辺 安男（5期生）

島根県立古代出雲歴史博物館が島根県出雲市の出雲大社の隣に平成19年3月に開館しました。

私は、この歴史博物館のPR御師(広く、県内外の人にこの施設展示を宣伝するため)を1年間務めましたので、古代出雲の出雲国風土記と弥生青銅器文化について述べたいと思います。

この古代出雲歴史博物館には出雲風土記が展示されていますが、これは元明天皇・和銅6年(713年)に出された勅命に基づき、諸国(当時62力国)が編集した地誌(郡名の由来、伝承、産物、土地)で、このうち出雲、常陸、播磨、豊後、肥前の5力国の風土記(写本)が現存します。完本は出雲国風土記(成立:天平5年(733))のみで、出雲地方人々の生活、信仰、伝承、自然のありさまを正確に伝えられています。

また、この歴史博物館の展示物なかに、平成20年7月に国宝指定された銅鐸など青銅器があります。特に、銅鐸は、平成8年10月に島根県雲南市加茂町岩倉(加茂岩倉遺跡)の農道工事現場で39個の銅鐸が見つけられました。この39個はこれまで日本で発掘された銅鐸の数を上回っています。また、この遺跡から、北西に約3.4km離れただけの、斐川町神庭西谷(荒神谷遺跡)でも、昭和59年に銅剣358本(日本最多)、昭和60年に銅鐸6個、銅矛16本(1カ所当たり日本最多)が発見されました。

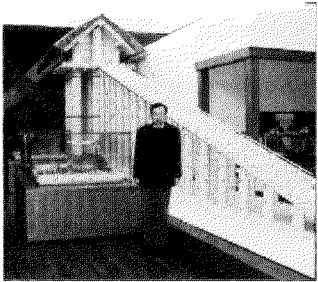
出雲風土記伝承においては、加茂岩倉遺跡付近のことについて「所造天下大神(大穴持命)神御財積み置き給ひしところなれば、則ち神財郷と謂うべきを、今の人猶誤りて神原郷と云ふのみ」や荒神谷遺跡付近のことについては「この地は、もとは宇夜里といい宇夜都弁命が天降られた所(大黒山)だ。しかるに景行天皇が『吾が子倭健命の名を忘れじ』と言われ建部郷(たてべのさと)と改めた。」と記載されており、この荒神谷遺跡付近が、出雲国名の発祥地ともいえる出雲郡にあり、また神名火山(仏経山)付近のこの一帯が古代出雲の中枢部と思われる郷のため、大和朝廷の出雲進出の拠点として、唯一大和朝廷一族の倭健命(やまとたけるのみこと)にちなむ郷名にしたのではないかと論じられています。これは出雲の国の首長の支配に介入した大和朝廷が支配下に置いたために地域の祭祀として利用された銅鐸、銅剣などを放棄させるために埋めたさせたのではないかと考えられています。

当時この出雲地方に大和朝廷に対抗する、もしくはそれ以上の一大勢力があったことの証しではないかと思われます。

出雲大社に代表される島根には、こんな古代からの謎が

たくさん隠されています。皆さんも一度足を運んで、このロマンに接してみてください。

島根県は、今NHKの朝の連続ドラマ「だんだん」の舞台であると共に、世界遺産「石見銀山」もありますので、この機会にぜひ古代ロマンに浸ってください。



島根県立古代出雲歴史博物館(出雲大社の東側)
常設展示 国宝(荒神谷遺跡出土品、加茂岩倉遺跡出土品)、出雲大社境内遺跡出土品ほか
島根県出雲市大社町杵築東
TEL:0853-53-8600代



広土会創立40周年記念に寄せて

広島県東広島地域事務所建設局
竹原支局仁賀ダム建設事業所
行迫 孝治(25期生)

広土会創立40周年おめでとうございます。

前回の35周年では事務局として携わっていましたが、あっという間に40周年を迎えあれから5年も経過したのかと、歳を取るスピードの早さに驚いております。

祝賀会では多くの懐かしい面々との再会に、楽しいひと時を過ごすことができました。

皆それぞれの職場において、高い志を持って活躍されており、自分自身も負けてられないと感じることができる良い機会でありました。

現在、私は広島県東広島地域事務所建設局竹原支局仁賀ダム建設事業所という職場に勤務しております。

ダム本体工事の日々の施工監督に追われているところですが、このような大規模事業に携わることができるのも、極めて稀といった厳しい時代となっております。年々公共事業費は削減され、市町への権限委譲など、将来の土木行政における我々の使命がかすんでいるように思われます。

思い起こせば私が広島県に採用となったのが1993年、もう15年目となりましたが、社会人一年目の私がどんな夢を抱いていたのでしょうか。残念ながら振り返ってみてもたいたことは考えていなかったように記憶しております。

そんな私が、社会人15年目になって考えること、今後何をやっていかなければならないのかを少し語ってみましょう。

近年は、局所的な集中豪雨(ゲリラ豪雨)による被害が、新聞、テレビ等で大きく取り上げられています。皆様の記憶にも新しい2008年7月には、神戸市の都賀川で5名の尊い命が失われました。短時間で河川の水位が上昇する、衝撃的な映像に唖然としたのは、私だけではなかったのではと思います。

こういった今までの常識を覆す自然災害が、確実に増加しております。

広島県においても低平地に人口が集中する都市構造であるため、局所集中豪雨により同様の被害を受ける可能性は否定できません。私たちはこれからも豪雨被害を最小限に留め、安全で安心して暮らせる街づくりを行っていかねばならないのです。

公共事業に対する風当たりは非常に厳しいものがありますが、緊急性、必要性等を的確に判断し、限られた予算の中でいかに投資効果を発揮させるか、知恵をだすのが私たち土木行政に携わる技術者の使命と考えております。

まだまだやらなければならないことはたくさんあるのです。

最後になりましたが、広



土会の益々のご発展と、次回記念祝賀会での皆様との再会を期待しております。

広土会創立40周年記念 事業開催報告

1. 広土会

広土会は、昭和43年10月に建設技術の向上、会員相互の親睦等を図ることを目的に広島工業大学工学部土木工学科の卒業生及び在校生並びに教職員を構成員として結成された組織です。

土木工学科は、平成9年度に建築学科と融合し建設工学科と改名され、また、平成18年には、学部の改組転換により、「都市建設工学科」となり、構造物の設計の分野、建設材料と地盤の分野、水環境と都市空間の分野について、都市を守るための技術を総合的に学ぶ学科として生まれ変わりました。

広土会は、現在、都市建設工学科内の本部をはじめ、全国に11支部を置き、会員数も4000名を超える大きな組織に発展しております。会員は、全国はもとより、世界各地において、建設業界をはじめ数多くの分野で指導的役割を果たすとともに、社会・経済の発展に大きく寄与しているところ です。

2. 記念事業開催の趣旨

広土会創立40周年を迎え、これまでの歴史を振り返り、会員相互の親睦を深め、今後の広土会とその会員がより一層、社会に向けて飛躍し、明るい未来を力強く歩いていくことを祈念し開催しました。

3. 記念事業の内容

(1) 記念講演会

日時:平成20年7月19日(土) 17:30~18:30

場所:リーガロイヤルホテル広島

4階クリスタルホール

演 題 向き、不向きより前向き

講 師 有賀さつき氏(フリーアナウンサー)

聴講者 約350名

(2) 祝賀懇親会

日時:平成20年7月19日(土) 19:00~21:00

場所:リーガロイヤルホテル広島

4階ロイヤルホール

来 賓 鶴岡鶴学園理事長・総長、坂本孝徳鶴学園副総

長、茂里一紘広島工業大学学長

白川耕市広島工業大学事務局長、横山健次広

島工業大学同窓会会長

山口克徳電友会幹事長、渡辺武彦五三会会長、

鈴木建夫元広土会会長

平口洋衆議院議員

参加者 約500名

(3) 記念誌

記念DVD・CDを作成(発行部数550部)

4. 感想

平成19年8月に記念事業準備委員会を発足して、4回の会議を経て、記念講演会及び祝賀会を開催し、記念誌を発行するまでの約2年半が慌ただしくすぎ、広土会40周年記念事業も終了することができました。事前の準備、券の販売及び記念誌広告募集等に尽力された、実行委員及び各期幹事並びに数多くの卒業生等、関係各位の協力により成し遂げられたもので、広土会の行動力・結束力を実感しました。

諸先輩方が培われた歴史に敬意をはらうとともに、さらなる飛躍にむけて新しい力、若い力を加え、50周年へつなげて行きたいと思います。

創立40周年記念事業実行委員 竹内 秀一(16期生)